

Daily Report (号外)

～3月の米国消費者物価指数について～

結果概要

米国労働省が4月10日に発表した3月の消費者物価指数(CPI)は前年同月比+3.5%と市場予想(同+3.4%)を上回り、前月(同+3.2%)からも伸びが加速しました。前月比は+0.4%と市場予想(同+0.3%)を上回り、前月(同+0.4%)から伸びが継続しました。

エネルギーと食品を除くコアCPIは前年同月比+3.8%と市場予想(同+3.7%)を上回り、前月(同+3.8%)からは横ばいとなりました。前月比のコアCPIも同様に+0.4%と市場予想(同+0.3%)を上回り、前月(同+0.4%)からは横ばいとなりました。

CPIの個別項目では、自動車燃料が前月比+1.7%(前月同+3.8%)と前月から伸び率は縮小したものの依然として高い伸びが継続しているほか、医療ケアサービスは前月比+0.6%(前月同▲0.1%)と上昇に転じ、電力は前月比+0.9%(前月同+0.3%)、輸送サービスは前月比+1.5%(前月同+1.4%)と上昇が加速しており、サービス分野を中心にインフレの沈静化に時間を要していることを示す結果となりました。

市場反応(米国市場)

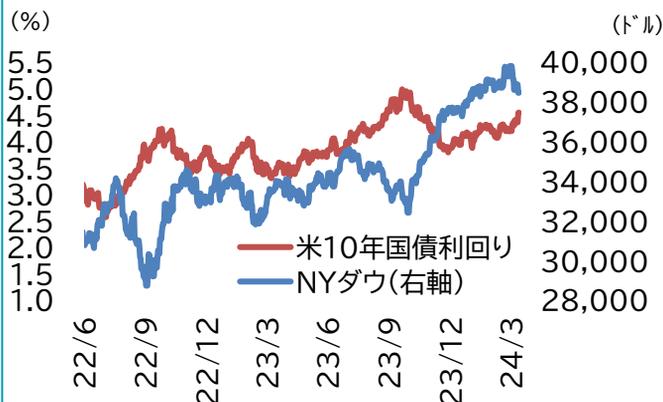
10日の米国株式市場では、主要3指数は揃って下落しました。

市場予想を上回るCPIの結果を受けてインフレ圧力の根強さを背景に利下げ開始時期が一段と遅れるとの見方が強まったことで幅広い銘柄に売りが広がり、NYダウ平均株価は前日比▲1.09%、S&P500指数は同▲0.95%、ナスダック総合指数は同▲0.84%となりました。

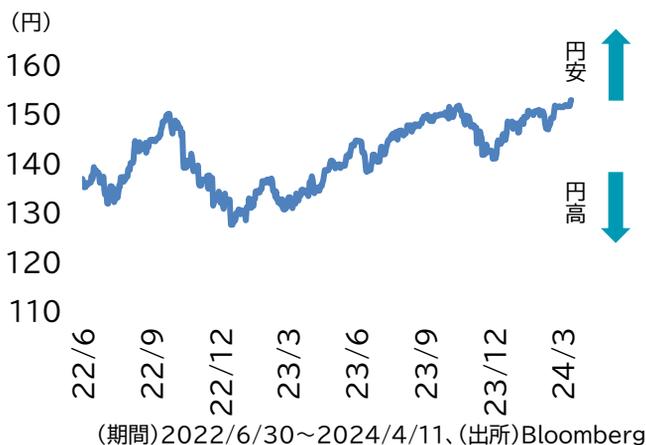
米国債券市場はCPIが市場予想を上回り年内の利下げが1～2回に留まるとの見方が強まったことを背景に、米10年金利は前日比0.18%上昇の4.54%程度で引けました。

米ドル/円はCPIの結果を受けて米長期金利が上昇し日米金利差が拡大したことなどから円売りドル買いが進み、前日比1円40銭円安ドル高の153.16円程度で取引を終えました。1990年6月以来の1ドル153円台となり、歴史的な円安水準となっています。

NYダウと米10年国債利回りの推移



米ドル/円の推移



運用実績等は過去のものであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

また、シミュレーション等(前提は資料参照)については結果を確約するものではありません。

評価・今後の見通し

今月のCPIは前年同月比及び前月比が市場予想を上回り伸びが加速しました。また、エネルギーと食品を除くコアCPIも、CPIと同様に前年同月比と前月比の双方で市場予想を上回り、インフレの高止まりを示唆する結果となりました。

モノの価格は一定の落ち着きを見せる一方で、原油価格やサービス関連の価格の上昇が継続しており、インフレの根強さを示唆する内容となっています。

市場が予想する利下げ時期は、5月FOMCで利下げを見送る確率が96%程度とほぼ大半を占めている他、6月FOMCで利下げを見送る確率が指標発表前日(4月9日)の42%程度から、CPIの発表後には83%程度まで大きく上昇しており、FRBの利下げ開始時期については後ずれするとの見方が強まっています。

今後の株式市場の見通しとしては、短期的には15日発表の米小売売上高など引続きインフレや景気動向に関連する指標に加え、4月17日公表のベージュブック(米地区連銀経済報告)に注目が集まるものと考えます。また、緊張感の強まるガザ地区戦闘の動向は原油価格上昇を通じてインフレ懸念を一段と高める可能性があるため、注視が必要です。

長期的にはFRBは市場の利下げ期待をけん制しつつ、慎重に金融政策を実施していくとみられることから、経済指標次第の様相が強まるボラティリティの高い相場が継続すると見えています。

また、今後インフレの高止まりにより、政策金利が現状の水準に長期的に維持され、それにより米景気が大きく減速するリスクには警戒が必要と考えます。